

応用演劇で哲学対話してみた  
「演劇×哲学、演劇で現象をとらえなおす」をふりかえる  
佐々木英子（アプライドシアター研究所主宰）

---



### 1. はじめに

2018年11月25日、東京大学駒場祭の哲学カフェにて、「演劇×哲学、演劇で現象をとらえなおす」と題して、応用演劇をつかった哲学対話を試みた。ファシリテーションを担当したのは、アプライドシアター研究所で応用演劇コースに参加する研修生たちである。応用演劇とは、演劇を応用した「実践」のことであり、机上の空論を行っていても意味がない。そこで、「何が起こるかわからず、即興で対応しなければいけない現場でやってみよう！」という実習の一環でもあった。

一般的には、演劇といえば、劇団四季や歌舞伎などの舞台を想像するかもしれない。しかし、私たちの専門は、「応用」演劇とあって、いわゆる商業演劇とは違い、演劇をツールにして、参加者に、観客にも俳優にもなってもらえるような参加の場をつくることなのである。

筆者のこれまでの対話関連の活動をふりかえると、例えば、2001年にこどもの城・青山円形劇場で行った、発達障がいのこども達も参加したメキシコのストリートチルドレンとレスラー神父の実話を描いた演劇公演や、2012年には、エジンバラ演劇祭にて、東北被災地からツイッターで発信し続けた福島の詩人、和合亮一さんの詩と日本の伝統芸能である

和楽器と能をコラボさせた朗読劇の公演の後に、客席との垣根を取り払って自由な対話を行ったことがある。

留学から帰国した 2013 年以降は、哲学対話自体を、中学校の異文化コミュニケーション講座に取り入れたり、シアターゲームで心身をほぐしてから即興で問いを立てて行ったり、演劇手法を変形させて対話のツールにしたりするなど、演劇×哲学対話を独自で試行してもきた。

本稿においては、応用演劇の中心的な手法の一つである「フォーラムシアター」を駒場祭の哲学カフェで試みた実践をふりかえるとともに、そもそも応用演劇は哲学対話といえるのか？何が同じで何が違うのだろうか？といった素朴な疑問についても少し考えてみたい。

## 2. 応用演劇とフォーラムシアター

### (1) 応用演劇とは何か？

最初に、筆者の専門である応用演劇について少し紹介しよう。応用演劇とは、アプライドシアター (applied theatre) の和訳であり、90 年代から欧米中心に急速に広がってきた分野である。包括用語として、ふだん演劇をしない人たちを対象に演劇を応用した場全般を指している。

前述のように、演劇といえばエンターテイメントと思われるだろうが、原初、演劇はコミュニティと人々の絆を深めた民衆のための祝祭<sup>1</sup>であり、現在のように劇場が観る側と観られる側を区別したのは後のことだった。その後、現代に入り、再び劇場の壁を取り払い、演劇を野外に戻しコミュニティに再度つないだものが応用 (演劇) であり、多様な背景を元に成り立つ現代演劇の一つであるといわれている。

21 世紀に入り、応用演劇の分野においても、個人やコミュニティ、とりわけ、被抑圧者や傷つきやすくもろい状況にある人たちのために、演劇をツールに解放やエンパワメントを行い、変容を促す場が主流となってきた。日本では、1997 年に「応用演劇」という和訳が紹介された後、2003 年、2010 年に、前者ではイギリスの生活の中の演劇が、後者ではチェスター大学アレン・オーエンズ教授と共に開発されたプレテキスト

## 実践の扉

を使ったドラマによる教育が、それぞれ「アプライド・ドラマ」<sup>2</sup>として、イギリス在住のナオミ・グリーン氏によって紹介された。

2011年東日本大震災以降は、日本においても多様な実践が広がりを見せてきており、哲学分野においては、2014年～2016年に「哲学ドラマコレクティブ」グループが、東大駒場祭や共生のための国際哲学研究センター（UTCP）とコラボして、オーエンズ教授とグリーン氏によるプレテキスト手法を用いたワークショップを試みている。2013年、後にこのグループを立ち上げた大谷賢治郎氏と松山侑生氏の初顔合わせの場に筆者も居合わせていたことを思い起こすと感慨深い。

### （2）フォーラムシアターとは何か？

次に、フォーラムシアターについて簡単に紹介する。この手法は、21世紀型応用演劇の源流の一つである、「被抑圧者の演劇」を提唱したブラジル出身の演劇家で活動家だったアウグスト・ボアールにより生み出された応用演劇の中心的な手法の一つである。

主役（プロタゴニスト）が直面している葛藤のある状況・環境が最悪の状態である寸劇を見て、参加者がその状況を巻き戻し、プロタゴニストにとってより良い結末となるよう、実際に演じたり、役者に演じてもらったりしながら即興でつくり直していく。

参加者は、自分が住んでいる課題を抱えた環境を、演劇をとおして意識化し、劇に、観客でありながら能動的に関わるスペクト・アクター（観客-俳優）としてストーリーを変化させていくことができる主体となる。このプロセスが、そのグループ全体による演劇をとおしたフォーラム、つまり公開討論の場となることから、フォーラムシアターという。欧米では、ドラマ教育や企業研修などでも取り入れられており、昨今、日本でも少しずつ知られてきている。

今回の場においては、このプロセスを多様な身体性をとおした対話ととらえ、現実的に社会現象となっている課題を含む寸劇を刺激として見てもらい、そこから問いを立てて対話を行っていった。

### 3. フォーラムシアター「あるデザイン事務所での出来事」



#### (1) 刺激としての劇づくり

哲学対話として実践するにあたり、ウォームアップとして、まず、研修生チームで討論ゲームと哲学対話を体験し、その差異について対話するところから始めた。フォーラムシアターの準備としては、最近気になっている身近な社会現象を洗い出していったが、ブラック企業における過労死が日々報道されていた時期でもあり、職場で目にしたいじめ、差別の課題などを中心に、それぞれが気になっている事柄を抽出していった。そこから対話を繰り返し、二転三転しつつ、最終的に舞台をデザイン事務所にすることに決定した。

登場人物は、当日参加できる人に変更が出るなどしつつ、最終的には、長年勤務している非正規社員で、今回の案がチーフに通れば正社員への道が開ける主人公 A、業界で名が知られているチーフ、最近入社した正社員でセンスをチーフに買われている B と、進行役ジョーカーに設定。

物語のプロットは、試行錯誤の上、「A と B が事務所でデザイン作成にいそしんでいる。A がチーフに案を見せてもチーフは納得しないが、B が見せるとセンスをほめる。チーフと B は飲みに行くが、A は制作に集中したいために断る。翌朝、遅刻した A は案もさらに酷評されてしまう。一方、B はさらに褒められる。数日後、決定した案は、チーフの名前で制作された A の案と瓜二つのもので、つまり A のデザインの盗作だった。正社員の道を断たれた A は希望を失い落胆する」に決まった。

## 実践の扉

### (2) 実践のプロセス

駒場祭当日は、晴天に恵まれ、こまば哲学カフェが主催する教室にてワークショップが開催された。時間になると演劇に関心をもつ人や通りがかりの人など、社会人、主婦、学生、親子など10名強の参加者が三々五々集まってきた。学祭の性質上、途中入退場する人たちもいたが、最終的には、参加者全員が、グループごとに、観た劇の中から様々な問いを出し、それぞれが考えた「どうすれば主人公の未来をよりよく変えることができるか」について、アイデアを出し合い何かしらの役を演じ、また、観る側演じる側が混ざり合って対話を行うことができた。

プロセスとしては、はじめに、こまば哲学カフェが掲げるルール「①人の話をさえぎらずに聞く②他者を攻撃せず尊重する③他人の考えの紹介に終始せず自分の考えを話す」を参加者と一緒に確認し、自己紹介を終えたと、ウォーミングアップとして、劇のテーマにリンクするようないくつかのシアターゲームを伏線的に行った。その後、準備した劇を見せ、この劇からの問い出しをグループごとに行い、全体でシェアした。そして、そのストーリーをどのように変えればより良い結末になったかについて、それぞれのグループに分かれて演じ合い、それを全体でもシェアして対話を深めた。最後には、全員でふりかえりを行った。

参加者からは、多様なアイデアが引き出された。小学生が混ざったグループにおいては、小学生が元の劇にはなかった登場人物である「社長」となり「チーフがダメだねえ」と一声発することで、それまで威張っていたチーフが一瞬で弱い立場になり、ステイタスが入れ替わった。また、コミュニケーション不足を課題としたグループでは、チーフの誘う飲み会に主人公が断らずに同席し、ペットの共通項で会話が盛り上がり関係性を改善させることでストーリーを変えた。ほかにも、主人公が自分の案の盗作とわかった瞬間に、怒りの感情を直接ぶつけることによりチーフに「公表しようと思ってたんだ」と言わしめるも、同僚も盗作されていたことがそこで判明し、チーフがそれ以上逃げられなくなってしまいうというグループがあるなど、一人ひとりが主体となり、様々な解釈、ア

アイデアで劇は次々につくり変えられていった。はじめて会ったばかりの参加者同士が、演劇の力をとおしてあつという間に本音で対話し、イキイキと楽しそうに演じていたのが印象的だった。

### (3) 参加者の感想

終了後に回収された参加者からの感想には、「(演劇で見た) 状況は難しく A さんが気の毒だった」「個人で行うことには限りがあり、他者が必要だと思った」といった、劇の主人公に共感的なものや、「台本のないストーリーを作るととても面白かった」「社長役を演じたのがおもしろかった(小学生)」といった演劇をつかうことの面白さへの言及、また、「いくらでもストーリーは変えられるということに気づいた」「自分だけでは思いつかなかったことに他の方がつくったシーンを見て気づけた」、「色んな意見があつて発見することがあつた」といった、会ったばかりの多様な他者との演劇をとおした対話による「気づき」「発見」に関する感想が多々見受けられた。

さらに、「物事を善悪でとらえると行動改善の選択肢が少なくなるけど、第三者視点で見て、それぞれの改善点をあげていけば、よりよい社会をつくっていける気がした」というものもあつた。ミードが「主我が住んでいる状況に対する反作用こそが、重要な社会的変化を引き起こす」<sup>3</sup>といい、ボアールが「演劇は変革の武器でありリハーサルである」<sup>4</sup> というように、客観的に見るのが難しく、感情や善悪でとらえてしまいがちな自分が住む世界における葛藤も、演劇をとおして立体的に外在化／客体化させることにより異化し、二元論を越えて多様な視点に立ち、自由に対話できるようになる。そして、この安全な場におけるリハーサルを経て、何かしらの気づきを経験し少しばかり変容した、もしくは変容しつつある自分をたずさえて、再創造する主体であるそれぞれの現実の世界へと戻っていくのである。

## 実践の扉

### 4. 哲学対話と応用演劇

#### (1) 21世紀型のパラダイム

ところで、哲学対話と応用演劇の親和性は確かにあるようだが、なぜそう感じるのだろうか？そもそも、これは哲学対話といえるのだろうか？哲学対話にも参加したことがある参加者からは、共通点として「問いがたくさんあったこと」また、相違点としては、「演劇をつかうと参加している気がする」「(テーマを) ストーリーとして目で見ることができた」「身体性と前概念的体験ができた」などの感想があった。

こまば哲学カフェの顧問で UTCP センター長の梶谷真司氏はその著書「考えるとはどういうことか」<sup>5</sup>において、哲学とは「問い、考え、語ること、聞くこと」であり、哲学授業においても心がけていることは、彼ら自身が「哲学を『体験』すること」と述べている。また、哲学対話のルールとして「①何を言ってもいい②人のいうことに対して否定的な態度をとらない③発言せず、ただ聞いているだけでもいい④お互いに問いかけるようにする⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す⑥話がまとまらなくてもいい⑦意見が変わってもいい⑧分からなくなってもいい」を挙げている。

興味深いことに、これら哲学対話の前提となるものは、21世紀型の応用演劇の前提とほぼ重なるのである。つまり、応用演劇は主体となって「演劇を『体験』する」参加型の場であり、上記の8項目は、①どう表現してもいい②人の行うことに対して否定的な態度をとらない③演じずにただ見ているだけでもいい④相互に行う⑤自分自身の身体性をつかう⑥上手くできなくていい⑦変化はむしろ大歓迎⑧わからなくていい、に自動変換できるのだ。そして、「問い、考え、語ること、聞くこと」が哲学であるならば、応用演劇のプロセスは身体性をとおして哲学することともいえる。

円になり関係性をフラットにすることも、多様性を生かし、一人ひとりが抑圧されない主体であることを重視するところも共通である。演劇の本質的な特性である「共感性」については、「客観的・批判的思考が難

しくなり、哲学対話にとっては弱点になるのでは？」とひそかに危惧したが、否定どころか、意義・効用の一つとして挙げられている。

すると、新型の哲学である哲学対話とは、哲学をツールとして、抑圧された思考を自由に解放し、多様な他者とみんなで楽しく考える場ともいえるだろうか。一方、新型の応用演劇もまた、演劇をツールとして、個人・コミュニティの抑圧を解放し、多様性のある他者とみんなで楽しく、気づきをとおして自己と環境を変革していく場なのである。これらから、哲学対話と応用演劇は、その本質的なパラダイム自体に共通性があり、親和性があることがわかる。

さらに、哲学が「問い、考え、語ること、聞くこと」であるならば、少なくとも新型の応用演劇の場においては、そのプロセスにおいて哲学することなしには成り立たない。すると、応用演劇を、ある意味、身体性をとおした哲学対話ということもできるのではないだろうか。

## (2) 哲学と演劇のコミュニケーション

それでは、これらの違いはどこにあるのだろうか？感想にあるように、演劇をツールとする場合は、テーマもストーリーとして立体的に示され、芸術様式に守られながら、有機体としての身体全体で考え対話することになる。プロセスにおいては、相互作用により共感性が刺激され、前概念的な体験も含め、多元的にコミュニケーションを行うため、参加しているという感覚を、さらに味わうことになるだろう。

人間は多様であり、誰もが自分の考えを理路整然と言語化できる状態にあるとは限らない。哲学対話は、そのルールにおいても、上手に話すことを目的としてはいない。しかし、脳神経の発達段階が、非言語から言語へと発達していくように、演劇ではさらに未分化な感覚、感情なども含んだ身体全体をつかうため、進化した言語により客観的にコミュニケーションできる哲学と比べて、よりインクルーシブで、ふだん言語化できず抑圧されていた感覚・感情も解放できる場となりうるだろう。

実施形態としては、応用演劇のファシリテーションには、内容によっ



## 実践の扉

て、人数、準備が必要になるため、時間、コストもかかってくる。一方、哲学対話は、気軽に実施することができ、現実的には幅広い場にすぐに取り入れやすいのではないだろうか。

実は、個人的には、思考するときには、腑に落ちるまで徹底的にぐるぐると思考して深めていくことが好きなため、思考するならば他者の言葉を刺激に、ある程度身体を忘れて思考に集中できる、他者といながら孤独でもありえる場が理想だったりする。一方、演劇では、他者と共有する時空にひもづいた身体性を伴うため、全てを閉鎖して簡単に次元を飛び越えて思考の世界だけに入り込むことはなかなか難しい。その代わりに、自由に演じていたとしても、他者と共有する時空（コミュニティ・社会）や本音（感覚・感情）を含んだ対話になりやすいだろう。

フォーラムシアターのように、生活に直結したコミュニティや個人の課題を多様な他者と対話する際には、身体がひもづく現実にある程度そくしていなければ、実際に現実に生かす解決策を探るための対話にはなりえない。また、応用演劇と同じく、生徒が主体になるように双方向の場で行うドラマ教育が、イギリスで道徳や市民性教育によく活用されているのは、身体性をとおした対話により、共感性をつかい他者への想像力を自然に育みながら、個人だけではなく、そのコミュニティへの参加と変革を同時に促すからだろう。

## 5. おわりに

21世紀に入り、様々な場のパラダイムが転換してきているようだ。IT革命や地球変動といった大きな環境の変化の中で、前例のない状況をみんな生き抜いていくために、多様性を生かし合い、一人ひとりが環境を自分事として意識化し、主体的に、自分たちに合った環境を楽しんで再創造していこうという共生の場への転換ともいえるかもしれない。

ロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキーによれば、人間には、一人ではできないことも、みんなであればできる領域があり、そしてその力を一人ひとりの力に変えていくことができるのだという。哲学対話も応用演

劇も、間違えなく、そういった新しい場の実践という意味において共通しているのではないだろうか。純粹に思考することはとても楽しいが、機会があれば、ぜひ、演劇による対話も試してみしてほしい。

末筆ながら、この度、貴重な場を快く提供してくださったこまば哲学カフェ顧問の梶谷真司先生、代表の小林大輝さんをはじめとする運営委員の皆さまに心から感謝している。また、講師としてフォーラムシアターを共につくりご指導いただいた、演劇デザインギルドの花崎攝さん、演劇百貨店の柏木陽さんにも、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

※フォーラムシアターの台本を使用したい、詳しく学びたい、応用演劇を知りたいなど、何かございましたら、お気軽に以下までご連絡ください。

**【連絡先】**

appliedtheatre17@gmail.com

**【アプライドシアター研究所ウェブサイト】**

<https://appliedtheatre.wixsite.com/labo>

**註**

- 1 演劇のはじまりには諸説あるが、ここでは応用演劇における言説を採用した。
- 2 グリーン, ナオミ (2003) 『蜂はチクリと刺すことをしていますか? : 生活の中の演劇アプライド・ドラマ』 カモミール社  
オーエンズ, アラン & グリーン, ナオミ (2010) 『やってみよう! アプライド・ドラマ』 (小林由利子編) 図書文化
- 3 船津衛 (2000) 『GH ミード: 社会的自我論の展開』 東信堂
- 4 Boal, A. (1993) *Theatre of the Oppressed*, translated by Charles A. McBride, Theatre Communications Group: New York
- 5 梶谷真司 (2018) 『考えるとはどういうことか: 0歳から100歳までの哲学入門』 幻冬舎新書